

機関番号 : 47703

研究種目 : 基盤研究 (C)

研究期間 : 2007~2010

課題番号 : 19520037

研究課題名 (和文)

幸福の普遍性と共同善の超越性—トマス・アクィナスにおける人間論の展開

研究課題名 (英文)

Happiness's universality and transcendence of the common good -Deployment of the human theory in Thomas Aquinas-

研究代表者

佐々木 亘 (SASAKI WATARU)

鹿児島純心女子短期大学生活学科・教授

研究者番号 : 40211940

研究成果の概要 (和文) : 本研究の具体的な成果は以下の通りである。第一に、「共同善への運動」という観点からトマスの共同体論に関する博士論文を作成して神戸大学大学院経済学研究科から博士号を取得し、また知泉書館から『共同体と共同善—トマス・アクィナスの共同体論研究—』として出版したこと。第二に、京都大学への博士論文を補完した著書『トマス・アクィナスの人間論—個としての人間の超越性—』の英訳が完成したこと。そして第三に、南山大学へ提出する神学の博士論文の作成することであり、これは 2013 年完成予定である。

研究成果の概要 (英文) : The concrete result of this research is as follows. In the first place, I produced the doctoral dissertation about the community theory of Aquinas from a viewpoint of "movement to the common good." As a result, I acquired the degree of Doctor of Economics from the Kobe University. And it published as "*Aquinas on the Community : Community and Common Good*" from Chisen Publishing Co. Secondly, I translated into English the book which complemented the doctoral dissertation to Kyoto University as "*Aquinas on the Human Being : The Transcendence of the Human Being as a Person*". Thirdly, I am producing the doctoral dissertation of the Theology which is due to be submitted to Nanzan University in 2013.

交付決定額

(金額単位 : 円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野 : 人文学

科研費の分科・細目 : 哲学・倫理学

キーワード : 人間論、幸福論、共同体論、正義論、自然法論、経済倫理学、共同善、神学

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究者は、トマス・アクィナスの人間論を中心に、申請時に 40 本以上の論文を公

表し、2003 年 3 月、京都大学から論文による文学博士の学位を取得し、2005 年 1 月に、この博論を補完した『トマス・アクィナスの人

人間論一個としての人間の超越性』という著書を、知泉書館から出版した。人間は、「似姿」の超自然本性的な完全性へと至る可能性において、「似姿としての主」である。人間的行為の倫理的意味、そして人間の生の実存的意味は、「似姿としての主」という観点から、「究極目的への運動における似姿の表出性」として個別的に問われる。それは、個における幸福の意味である。

(2) 似姿と主という言葉は、トマスの人間論の中核をなす用語であるにもかかわらず、似姿の表出性やはたらきの主の意味に関しては、国の内外を問わず、従来ほとんど研究がなされていなかった。しかし、人間は、「自らによって自らを動かす」という「能動と受動」に基づいて自己を超えた完全性へと歩む者であり、その運動のあり方に似姿と主の理解が決定的な仕方で係わっている。従来看過されてきた「能動と受動」という構造こそ、トマスの核心に位置しているのである。さらに、トマスの人間論においては、「個の運動」がそのまま「共同体の運動」に連動している。そこで、2004年度より、「自由の普遍性と正義の超越性—トマス・アキナスにおける人間論の展望—」という研究課題で、基盤研究(C)の交付を受けることができ、トマスの共同体論について研究を精力的に進めてきた。

(3) これは、共同体との関係において、個としての人間を位置づけ、個と共同体のあり方を自由と正義の関係から解明する研究である。従来見落とされがちであった自由と正義の有機的關係を、「共同善への運動」という仕方で捉えようとする点に、この研究の学術的な特色がある。じっさい、かかる関係とは、いわば「超越的な調和」に他ならない。

2. 研究の目的

(1) この研究における第一の目的は、「共同体と共同善—トマス・アキナスの共同体論研究—」という、二番目の博士論文を作成し、トマスの経済学研究に深い伝統がある、神戸大学経済学部の足立正樹教授のもとに提出することである。この博士論文は、哲学の博士号を有する者が、経済学の分野での学位取得を目指すものであり、哲学と経済学の双方に立脚しているという点で極めて学際的で独創的な内容を有していると言えよう。

(2) 第二の目的は、著書『トマス・アキナ

スの人間論一個としての人間の超越性』を全面的に英訳した、*Aquinas on the Human Being—The Transcendence of the Human Being as Person—*の出版を目指すことにある。じっさい、いかに優れた研究であるとしても、日本における文献学的な研究が海外で評価される機会はかなり限定的であるように思われる。それは、何よりも、「日本語」という言語的な要因に由来している。

(3) 第三の目的は、人間の幸福が有する「普遍性」を、人間の「個的な超越性」、および、全体としての共同体に由来する「共同善の超越性」という、二つの「超越性」の間に位置づけることである。このことは、哲学と経済学だけではなく、そこに神学をも加わった、極めて学際的な研究によって可能になると考えている。幸福に関する相対主義的な、そして個人主義的な解釈が横行する現代においてこそ、幸福に関する真に学術的な研究は、極めて重要であると言わなければならない。具体的には、「トマス・アキナスの幸福論研究」という、さらなる博士論文の作成を目指していく。

3. 研究の方法

(1) 第一の目的である博士論文を完成させるためには、「徹底的なテキスト分析」に加え、現代へと通じる思想史的背景について、綿密に検討していかなければならない。そのためには、「研究打ち合せ」と「専門的な知識の提供」が不可欠であり、学士院会員の山田晶先生からは「人間の自由とその必然性と共同体の超越性」について、稲垣良典長崎純心女子大学副学長からは、「自然法と正義の関係」について、野尻武敏神戸大学名誉教授からは、「トマスの共同体思想の展望と現代的意義」について、そして、足立正樹神戸大学教授と橋本昭一関西大学教授からは研究全般について、それぞれ指導を仰ぐ。

(2) 第二の目的である著書の翻訳に関しては、その作業そのものは本研究者が行うとしても、学術的な次元にまで高めていくためには、どうしてもネイティブの研究者による校正が不可欠である。哲学に明るい英国人で、鹿児島純心女子短期大学英語科専任講師（現准教授）である Glenn Forbes から、校正等の協力を受けることになる。京都大学から学位を取得した博士論文に基づく著書を英語による研究図書に深化発展させるためには、論文そのものの内容をより客観的に捉え、新

しく著書を書き直すことになるであろう。

(3) 第三の目的である「トマス・アクィナスの幸福論研究」に関しても、「徹底的なテキスト分析」に加え、現代へと通じる思想史的背景について、綿密に検討していかなければならない。「人間論研究」と「共同体論研究」の双方からの具体的な見通しをもとに、トマスにおいて人間の幸福がどのように位置づけられているか、それが現代の我々にとって何を意味しているのかを、明確に提示していかなければならない。この研究は南山大学キリスト教学科の江川憲教授より提出の具体的な要請を受けて進められるものである。著名な研究者からの「専門的な知識の提供」と研究打ち合わせが必要である。

4. 研究成果

(1) 第一の研究目的である経済学における博士論文の作成とその出版に関しては、2008年10月、神戸大学からの博士（経済学）の学位取得と、拙著『共同体と共同善—トマス・アクィナスの共同体論研究—』の出版に結実することができた。この研究は、従来見落とされがちであった「自己—他者—共同体」の有機的關係を、「共同善への運動」という仕方で探求している。この二つ目の博士論文は、哲学と経済学の双方に立脚しているという点できわめて学際的で独創的な内容を有しており、個の主権と共同善の關係を「共同善への運動における能動と受動」という観点から捉えようとする点に、本研究の学術的位置が明らかであろう。

(2) この二冊目の単著は、幸いなことに多くの反響を受けることができた。じっさい、トマスの自然法論や正義論に関しては、経済学や法哲学の分野で研究されてきたが、トマスの人間論的背景が正しく理解されていない場合も少なくない。五百旗頭真治郎博士による『キリスト教所有権思想の研究』という、きわめて優れた著作も半世紀前の研究である。本研究者は、五百旗頭博士の研究を、本申請者が多くの指導を受けた著名な法哲学者故水波朗九州大学名誉教授の研究を、そしてこの著書を献呈させていただいた経済倫理学の権威である野尻武敏神戸大学名誉教授の研究を、現在に新しく展開させていきたいと考えている。この点は、社会科学の分野だけではなく、宗教的分野をも射程に入れなければならない。そのため、10本に及ぶ研究論文を作成したが、「人間における連帯性—

トマス・アクィナスにおける自然本性の理解をめぐって—」、「トマス・アクィナスにおける人間の宗教的超越性—経済主体の多元性—」、「自然法とは何か—トマス・アクィナスの自然法論に関する—考察—」、「正義における美の秩序—トマス・アクィナスにおける正義の美的可能性について—」、そして「自然法と共同体—トマス・アクィナスにおける自然法の可能性について—」の5本は、以上のような展望に基づいている。

(3) 第二の研究目的である、著書『トマス・アクィナスの人間論—個としての人間の超越性—』の英訳、*Aquinas on the Human Being —The Transcendence of the Human Being as a Person—*は、Glenn Forbes 鹿児島純心女子短期大学英語科准教授の協力を受け、無事完成することができた。この著書は、能動と受動の構造において人間の超越性を位置づけるという点で、国際的な観点からも独創的であると考えている。しかし、「日本語」という言語的な要因から、いかに優れた研究であるとしても、日本における文献学的な研究が海外で評価される機会はかなり限定的である。海外の出版社に詳しい八巻和彦早稲田大学教授・中世哲学会会長、周藤多紀京都大学非常勤講師などの研究者から協力を受け、現在、複数の海外出版社に打診をしている段階であり、極力早く海外での出版を実現したいと考えている。

(4) 第三の研究目的である神学での博士論文作成に関しては、全体の構想は完了し、部分的には研究論文という形で進められている。そもそも、個としての人間の尊厳を共同体において基礎づけるためには、人間そのものが超越的存在である以上、共同体に関する研究も、本来、より超越的な観点からなされなくてはならない。すなわち、「個の幸福と共同善」の超越性に関する研究は、社会科学の領域では不完全な探求に終わらざるを得ない。この共同体論が現在の日本において何らかの意味を持ち得るとするならば、それは、いわゆるキリスト教思想の枠組みを何らかの仕方で超えた普遍性において、少なくともそのような意図のもとでの探求において、可能になるであろう。超越性を前提にした普遍性にこそ、本研究者は日本におけるトマス研究の可能性を見出している。この研究は、哲学と経済学の博士号を有する研究者が、それぞれの研究手法を十分に駆使し、同時にそれぞれの学問が有するある種の限界を超えたところで共同体の超越的な普遍性を探求す

る点に、きわめて独創的で学際的な特色がある。現在、2013年の夏までに南山大学の森正樹教授のもとに提出するよう努力している。なお、以下の5本の論文は、この博士論文の構想のもとに作成された。「目的の個別性と普遍性—トマス・アクィナスの目的論に関する一考察—」、「ペルソナと自然法—トマス・アクィナスにおけるペルソナの多元性をめぐって—」、「幸福への問い—トマス・アクィナスの幸福論に関する一考察—」、「対神徳の可能性—トマス・アクィナスにおける徳の区別について—」、「永遠法と自然法—トマス・アクィナスにおける自然法の超越性について—」。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ①佐々木亘、人間における連帯性—トマス・アクィナスにおける自然本性の理解をめぐって—、経済社会学会年報、査読有、No. 33、2011.
- ②佐々木亘、目的の個別性と普遍性—トマス・アクィナスの目的論に関する一考察—、鹿児島純心女子短期大学研究紀要、査読無、No. 41、2011、1-11、<http://www.k-junshin.ac.jp/juntan/libhome/bulletin/index.html>.
- ③佐々木亘、トマス・アクィナスにおける人間の宗教的超越性—経済主体の多元性—、経済社会学会年報、査読有、No. 32、2010、35-44.
- ④佐々木亘、ペルソナと自然法—トマス・アクィナスにおけるペルソナの多元性をめぐって—、日本カトリック神学会誌、査読有、No. 21、2010、96-108.
- ⑤佐々木亘、自然法とは何か—トマス・アクィナスの自然法論に関する一考察—、鹿児島純心女子短期大学研究紀要、査読無、No. 40、2010、9-16、<http://www.k-junshin.ac.jp/juntan/libhome/bulletin/index.html>.
- ⑥佐々木亘、幸福への問い—トマス・アクィナスの幸福論に関する一考察—、鹿児島純心女子短期大学研究紀要、査読無、No. 40、2010、1-8、<http://www.k-junshin.ac.jp/juntan/libhome/bulletin/index.html>.
- ⑦佐々木亘、対神徳の可能性—トマス・アクィナスにおける徳の区別について—、鹿児島純心女子短期大学研究紀要、査読無、No.39、2009、11-20、<http://www.k-junshin.ac.jp/>

[juntan/libhome/bulletin/index.html](http://www.k-junshin.ac.jp/juntan/libhome/bulletin/index.html).

- ⑧佐々木亘、永遠法と自然法—トマス・アクィナスにおける自然法の超越性について—、鹿児島純心女子短期大学研究紀要、査読無、No.39、2009、1-10、<http://www.k-junshin.ac.jp/juntan/libhome/bulletin/index.html>.
- ⑨佐々木亘、佐々木恵子、正義における美の秩序—トマス・アクィナスにおける正義の美的可能性について—、鹿児島純心女子短期大学研究紀要、査読無、No.38、2008、19-29、<http://www.k-junshin.ac.jp/juntan/libhome/bulletin/index.html>.
- ⑩佐々木亘、自然法と共同体—トマス・アクィナスにおける自然法の可能性について—、鹿児島純心女子短期大学研究紀要、査読無、No.38、2008、1-18、<http://www.k-junshin.ac.jp/juntan/libhome/bulletin/index.html>.

[学会発表] (計8件)

- ①佐々木亘、大学の危機的状況と哲学—地方ミッション系短大の場合—、京都ヘーゲル読書会平成二十三年度夏期研究例会、2011年7月3日、京都教育文化センター.
- ②佐々木亘、自然法と共同善—トマス・アクィナスにおけるペルソナと共同体—、第210回経済学史研究会、2011年6月18日、関西学院大学.
- ③佐々木亘、連帯性の人間論的根拠、経済社会学会第46回全国大会ラウンドテーブル2「中間組織の可能性：多元的秩序構想に向けて」、2010年9月19日、日本大学.
- ④佐々木亘、個の幸福における連帯性—トマス・アクィナスの共同体論を手がかりに—、第51回鹿児島哲学研究会、2010年9月4日、鹿児島大学.
- ⑤佐々木亘、経済主体の多元性—トマス・アクィナスにおける宗教的超越性—、経済社会学会第45回全国大会、2009年9月26日、龍谷大学.
- ⑥佐々木亘、ペルソナと自然法—トマス・アクィナスにおけるペルソナの多元性をめぐって—、日本カトリック神学会第21回学術大会、2009年9月15日、上智大学.
- ⑦佐々木亘、トマス・アクィナスにおける共同体論の可能性—『共同体と共同善』で問いかけるもの—、経済社会学会西部部会2008年度第二回研究会、2008年12月6日、神戸大学.
- ⑧佐々木亘、トマス・アクィナスの共同体の存在—自然法と正義をめぐって—、第194回京大中世哲学研究会、2007年6月30日、京大会館.

[図書] (計1件)

- 佐々木亘、知泉書館、共同体と共同善—トマス・アクィナスの共同体論研究—、2008年、

286 頁.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 亘 (SASAKI WATARU)

鹿児島純心女子短期大学生活学科・教授

研究者番号：40211940

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：